

抄録

第2回日本シニア小児科医連盟

講演1

「ワークライフバランスの推進が病院を活性化する」

清野佳紀（JCHO 大阪病院 名誉院長）

講演テーマ：10年間の女性医師支援がどのように病院を活性化してきたか。JCHO 大阪病院（旧大阪厚生年金病院）では、2003年頃から産婦人科医が多忙を理由に退職していき、3人になった。この流れを食い止めるべく、女性医師に短時間正社員など、育児支援制度を導入した。その結果、数年後には、女性医師を中心に産婦人科医は10人まで増員できた。この制度を全職種に導入するとともに、独身女性や男性に対しても、育児支援以外の介護や療養のために必要な場合には、短時間正社員制度などを導入した。この結果、職員の勤務環境が大幅に改善した。職場が働きやすくなるにつれて、医療収入は毎年増大した。

これらの原因を分析してみると、

1. 職員のモチベーションがあがる。
2. 医師など、職員の確保が容易になる。
3. 医師、看護師などは医療資源であり、医療系職員の確保とともにDPC係数が増大し、その結果医療収入が増大する。
4. 職場が生き活きとし、医療の安全確保に役立つなどが明らかとなった。

講演2

「iPS細胞技術の小児疾患領域への応用」

中畑龍俊（京都大学 iPS 細胞研究所副所長、臨床応用研究部門特定拠点教授）

山中伸弥教授のノーベル賞受賞後、iPS細胞研究は加速度的に進展し、より安全なiPS細胞作製法が確立されつつある。既に様々な疾患に対してヒトiPS細胞由来細胞を用いた前臨床試験が実施され、昨年9月、加齢黄斑変性の患者さんにiPS細胞から分化させた網膜色素上皮細胞を用いた世界初の再生医療が行われた。

また、様々な難病患者さんから作製した疾患特異的iPS細胞を用いた病気の原因解明、病態解析、新規治療法の開発が盛んに行われている。

本講演では、我々の研究を中心に、iPS細胞を用いた小児難治性疾患に対する取り組みについてお話ししたい。